

## 第26回日本医療薬学会年会の見どころ

### 京都大学医学部附属病院

#### 教授・薬剤部長 松原 和夫

#### ●テーマは「明日を創るチーム医療」●

日本医療薬学会年会は、医療現場を活躍の中心とした薬剤師が集う最大の学術集会です。参加者は9千人程度を見込んでいます。医療薬学会の理念は、薬物治療における薬剤師の役割を科学的な見地から考えることにあるといえます。

第26回医療薬学会年会のテーマは、「明日を創るチーム医療」です。ご承知のとおり、わが国の医療は疲弊し、それを救う手だてとして「チーム医療」の実践が求められています。そのチーム医療に、薬剤師の大きな役割と期待が寄せられています。しかし、現実の医療現場では、持参薬のチェックや処方された医薬品の説明にとどまっています。もっともっと薬剤師が積極的に参加するチーム医療を創っていかないとなりません。そのような薬剤師職能が担う医療を今年の年会のテーマとしています。

本年会では、特別講演5、教育講演1、企画シンポジウム4、公募シンポジウム47、一般演題約1,600の発表がございます。

#### ●チーム医療を発展させるために果たす薬剤師の役割とは●

さて先ほども少し触れましたが、わが国の医療制度は、団塊の世代が後期高齢者に移行する2025年をめどに、病床の機能分化と進行中の医療機能の分化・強化と連携が進んだ先にある医療介護サービスの提供体制である、地域包括ケアシステムへ移行するように制度改革が進められています。そのどの場面においてもチーム医療が求められますが、チーム医療の実践において、職種間の情報の共有は最も基本的なことです。また、地域包括ケアシステムの体制が整備されれば、患者は医療機関を移っていき、最終的に包括ケアシステムでくくられる在宅あるいは介護施設などで療養することになり、それらの移行タイミングにあっては情報共有と密接な連携が必要になります。そういった地域における情報共有の在り方も今年のテーマです。そこで、まず、特別企画シンポジウムとして、オーガナイザーに国立保健医療科学院の今井博久先生と神戸大学の矢野育子先生にお願いをして、「病診薬連携による地域におけるチーム医療の推進」を企画しています。すべての薬剤師が関

わるチーム医療について、ご討議頂けるものと思います。また、公募シンポジウムにおいても、「チーム医療」および「連携」に関するものが13ございます。

年会のテーマである「明日を創るチーム医療」に関連して、「明日の薬剤師」の姿を明確にするために、少し趣向の変わったシンポジウムを企画しています。このシンポジウムでは、日本病院薬剤師会の歴代の会長にご登壇頂きます。伊賀立二先生、堀内龍也先生、北田光一先生と現会長の木平健治先生です。それぞれの会長時代に取り組んでこられたこと、積み残されたことを含めて、明日への夢を語って頂くことによって、薬剤師の明日を浮き彫りにしたいと考えています。年会のメインテーマそのものであると考えています。当時の医療環境と将来を見据えて薬剤師が活躍できる場をどう創ろうとされたのか、あるいはできなかったことは何であったのかなどをお話いただくことによって、薬剤師の役割や将来像が浮かび上がってくるものと考えます。

また、チーム医療を実践していくうえで、法律の枠の中で業務を行うことは当然ですが、現行法規下における薬剤師のできる範囲について理解しておくことは、業務を拡大し「明日の薬剤師」を目指すうえで重要です。そこで、薬剤師の免許もお持ちで、この分野に明るい弁護士の方赤羽根秀宣先生に教育講演をお願いしています。

こうしたチーム医療を実践し、更に発展・定着させていくためには、薬剤師が積極的に関与するチーム医療のエビデンスの創出・集積が重要です。そうでないと、国民の皆様から信頼もされないし、診療報酬にもつながってまいりません。一方、わが国の基礎医学のレベルは世界でもトップクラスですが、優れた臨床研究となると欧米各国に比べ大きな開きがあります。なかでも、薬剤師による臨床研究は極めて少ないのが現状です。そこで、臨床研究に関わる分野では誰しもうかが認める第一人者でいらっしゃる京都大学医学研究科の福原俊一先生に、「現場の疑問に答える研究をデザインする」という演題で、クリニカル・クエスチョンの作り方についてのご講演を賜ります。他に、臨床研究に関する公募シンポジウムも3つございます。

#### ●近年の医療トピックスに関する講演も●

年会は、近年の医療におけるトピックスについて知識を得る重要な場でもあります。ここ数年来で医療における最もホットなトピックスは、「がん免疫チェックポイント療法」と「iPS細胞の実用化」ではないでしょうか。皆様ご存じと思いますが、どちらも京都大学から生まれたものです。まず、がん免疫療法に関しましては、京都大学副学長の湊長博先生に特別講演をお願いしています。湊先生は免疫学をご専門とされ、PD-1およびPD-L1をターゲットとしたがん免疫治療法を発案され、発見者の京都大学大学院医学研究科の本庶佑先生とともに開発されて、その基本特許をお持ちです。つまり、免疫チェックポイント療法の創始者ともいえます。なお、本年のノーベル賞の発表時期は年会の半月後に控え、本庶先生の授賞が有力視されているなかでの講演ですので、極めて興味深いと思っています。

もう一つのトピックスです。山中伸弥先生が発見されたiPS細胞に関しましては、着々と本格的な医療への応用の準備が進んでいます。iPS細胞による加齢黄斑変性治療に次いで期

待のかかる「パーキンソン病患者へのドパミン細胞移植」の責任者でいらっしゃる京都大学iPS細胞研究所の高橋淳教授にご講演頂きます。次いで、iPS細胞の活用、特に創薬開発へのiPS細胞の利用について、大阪大学大学院薬学研究科分子生物学分野の水口裕之先生、中外製薬の井上智彰先生および国立医薬品食品衛生研究所の佐藤陽治先生の3人の先生からご講演を頂くことになっています。

一方、わが国における医療薬学の展開には、米国における活動は非常に参考となります。そこで、米国医療薬剤師会、ASHPからご推薦を頂いたミネソタ大学薬学部のRobert J. Straka先生には、「Precision Medicine」についてのご講演を賜ります。Precision Medicineは、わが国では聞き慣れない言葉ですが、personalized medicineの先にある個別化医療として期待され、昨年、オバマ大統領が250億円を投じると発表し、一躍脚光を浴びている新しい概念です。

更に、もう一人、米国のがん治療施設として著名で、多くの日本の病院薬剤師も研修に行っていますニューヨークのスローケタリングメモリアルがんセンターの薬剤部長であるRichard Tizon先生に、がん治療におけるがん専門薬剤師の関わり方についてのご講演を賜ります。

保険薬局薬剤師の先生方には大事なシンポジウムがございます。公募シンポジウムとして、医療介護サービスの提供体制改革後の姿、地域包括ケアシステムにおいて重要な位置付けである地域の薬局について、日本薬剤師会が中心となった「かかりつけ薬剤師・薬局の現在と未来」というシンポジウムがございます。多くの保険薬局の薬剤師の先生方には興味深いものだと考えています。

#### ●震災関連からユニークな市民講座まで盛りだくさんの内容●

本年4月に熊本を中心とした大規模地震が発生しました。お亡くなりになられた方に対し謹んで哀悼の意を表します。また、被災された全ての地域の皆様ならびにご関係者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。この震災に対し、全国から沢山の薬剤師がボランティアとして、熊本地方に派遣されました。このことについて、東日本大震災を経験され、熊本にもたくさんの薬剤師を派遣して頂いた東北大学の眞野成康先生にシンポジウムを企画して頂きました。

最後に市民公開講座として、「サスペンスの街京都ー犯罪と薬物」のタイトルで3人の先生にお話をお願いしています。京都を舞台にしたサスペンスドラマが多いことをもじったタイトルで、犯罪防止を目的としたものです。法医学を専攻される女性教授である旭川医科大学の清水恵子先生に「法医学教室の事件ファイルー身近に起こる中毒」という題名で、元青森県警科学捜査研究所職員で弘前大学病院薬剤部長の早狩誠先生には「原因をさぐれー元科捜研の男から」という題名で、最後に、危険ドラッグに最も詳しい名城大学の野田幸裕先生に「危険ドラッグって怖いー薬の専門家からの提言ー」という題名でご講演をお願いしています。

最後になりますが、チーム医療はアメリカンフットボールに例えられます。基本的なこ

とは、それぞれの職種がその専門性を遺憾なく発揮して、責任を持って、治療というボールを患者と共にエンドゾーンまで運ぶことです。専門職の誰一人欠けても、あるいは技量が乏しければ、チームはボールをエンドゾーンまで運ぶことは難しいことになります。したがって、チーム医療の実践で最も重要なことは、それぞれの医療職間の密接なコミュニケーション（情報共有）と責任ある専門性の発揮であることを、参加者の皆様が、本年会を通して学んで頂けたら幸いです。